

「おが丸」出港時に鳴り響く見送り太鼓

——小笠原諸島父島における出会いと別れの物語（その 2）

李婧・河野正治・横田浩一

「おが丸」出港時の名物——見送り太鼓への注目

筆者らが前号に寄稿したエッセイでは、小笠原諸島父島の生活世界が「陸域」でも「空域」でもなく、まさに「海域」によって形づくられていることを紹介した〔河野・横田・李 2024〕。父島の文化的特徴はこうした海を跨ぐ人とモノの移動と切り離せない。前号でも触れた南洋踊りは小笠原住民とミクロネシア住民との出会いにルーツがあり〔小西 2019〕、父島の伝統的なカヌーは、1830 年代に持ち込まれたハワイ型カヌーを小笠原住民が改良したものである〔後藤 2010〕。果皮が薄く酸味がまろやかな「島レモン」は、ミクロネシアから八丈島を経て小笠原に定着した果物であり、今では父島の特産品として知られている¹。このような海を越えた文化混雑を背景に持つ父島の名物として、本エッセイでは、八丈島にルーツを持ち、「おが丸」出港時に披露される見送り太鼓を取り上げたい。

本エッセイの筆者の 1 人である李は、父島に来島する以前から見送り太鼓を楽しみにしていた。李自身、東京都王子を対象とする都市祭礼研究〔李 2022〕に取り組む過程で王子の「太鼓の会」に入会し、盆踊りや夏祭りの時に太鼓を叩いてきたからである。

以下では、このような李自身の個人的な背景も交えつつ、父島の見送り太鼓がどのような太鼓演奏であるのかを紹介する。

出港時に披露される見送り太鼓

祭りや盆踊りの際によく太鼓が披露されているというイメージを持つ方は、少なくないかもしれない。たしかに、父島で 11 月初旬に実施される大神山神社例大祭でも太鼓の出番はある（写真 1）。だが、この例大祭におけるメインは、あくまでも囃子の演奏である。むしろ、太鼓がメインとなる機会は祭りではなく、「おが丸」の出港日の見送り時である。

¹ 東京都産業労働局「TOKYO イチオシナビ——見つけて活かす東京の地域資源」
https://www.chiikishigen.metro.tokyo.lg.jp/introduction/details/introduction_46.html 2025 年 1 月 31 日閲覧



写真 1 大神山神社例大祭で演奏される小笠原太鼓（2024 年 11 月 3 日、李撮影）

前号でも述べたように〔河野・横田・李 2024〕、「おが丸」は数日に 1 便しか運航しないため、二見港からの出港もほぼ 1 週間に 1 便のペースである。ゴールデンウィークの前後や 7 月と 8 月のハイシーズンに便数が増えることを考慮に加えても、年に 60 回程度の出港しかない。とはいえ、見送り太鼓はほぼ全ての出港時に披露されており、1 年間で 60 回も披露の機会がある。この演奏状況は、少なくとも李の調査地である王子で太鼓が披露される機会と比べると、かなりの頻度となる。

「おが丸」の出航時刻は決まって 15 時 00 分である。出航の 20 分前頃になると、二見港待合所と「おが丸」との間のスペースに、およそ 7～8 名の演奏者が半纏姿で登場し、太鼓を並べ始める（写真 2）。並べられる太鼓の数は、時期によって異なる。3 月下旬には進学や転職などを理由に島を去る者も多いため、5 台もの太鼓で見送りがなされる。それに対して、11 月などの閑散期には、3 台しか太鼓を出さないこともある。このように、太鼓の数や演奏者の人数は一定ではなく、「おが丸」の乗船者数や、乗船者と住民との関係性によって決められるのである。



写真 2 見送りを準備する小笠原太鼓（2024 年 3 月 10 日、李撮影）

14 時 50 分頃になると、太鼓の演奏が始められる。太鼓の音は遠くまで響きわたる。そのため、太鼓の演奏が始まる瞬間には、二見港を賑わせていた人の話し声や笑いもピタリと止まり、力強い太鼓の音に耳をそばだてる。見送り太鼓は始まりからテンポが速く、迫力満点で「おが丸」の船内まで響く。太鼓の音を聞いて、船内からデッキに出てくる乗船者がいるほどに聞き応えがある。このように印象に残る演奏だが、実際の演奏時間はわずか 3 分ほどである。演奏の最後に、演奏者は太鼓の鉢を振りながら、「おが丸」に向かって「いってらしゃい」と声を張り上げる。この動作により見送り太鼓の演奏が完了する。

「自由に叩いていい」見送り太鼓

李自身、東京都王子で太鼓の稽古をする際、かなりの苦勞をしてきた。なかでも、「最初に決めた振りしかしないで」という太鼓の師匠の教えは絶対であり、この掟に従わなければいけない。王子で披露される太鼓は 1 人演奏となる盆踊りを除き、「組太鼓」を基本とする。そのため、演奏者は一列になって同じ振りで太鼓を叩かなければならず、見栄えを意識してか、挙げる手の高さなども揃えなければならない（写真 3）。



写真 3 李(右)が王子で太鼓を叩く風景

(2024 年 8 月 4 日、李の知人による撮影)

李は中国出身で東京に長く暮らし、王子という場所で太鼓の稽古を続けるなかで、太鼓の叩き方や演奏時の所作を身につけてきた。そのような身体感覚からすると、父島で披露される見送り太鼓は、李がこれまで付き合ってきた太鼓とは全く異なるものであった。

見送り太鼓は、八丈島太鼓由来の 2 人組みの両面打ちで、上打ち・下打ちと分かれる。下打ちは締め太鼓（リズムをコントロールする小さい太鼓）ベースのリズムを叩くのに対して、上打ちは自由に叩くことができる。ジャズの即興のように 2 人組で互いに呼応しながら、掛け合いのような雰囲気でも叩く。一定のリズムがあるにもかかわらず、叩いた音や演奏者の振りには個性が見られ、その意味で即興的な演奏である。

このような即興性は、決められた型を比較的重視する王子の太鼓ではなかなか見られない。李は普段と異なる太鼓を目で見るだけではなく経験したいと思い、「おが丸」出港日の翌日と翌々日に行われている見送り太鼓の稽古へと足を運び、実際に鉢を持って叩いてみた。太鼓の稽古の場自体はオープンな雰囲気でも、太鼓のメンバーのみならず、観光客などが訪れることもある。

初対面のメンバーと一緒に太鼓を叩くこともあり、鉢を手で持つ瞬間、李は緊張を覚えた。しかし、周囲のメンバーからの「自由に叩いていいから」という声に励まされ、徐々に締め太鼓のリズムに合わせて叩けるようになった。李のみならず、メンバーの技と振りも人それぞれであったが、結果的に一体感のある演奏が成立していた。

叩き終わった後、李は父島の太鼓に対して、王子の太鼓とはまた異なる魅力を実感していた。「最初に決めた振りしかしない」王子の太鼓の良さもあるが、「自由に叩いてよい」父島の太鼓の良さもある。両者を比べて、はじめて父島の太鼓の即興さを実感できたし、そのような「自由さ」があるから、この島に縁がなかった李にも、太鼓を叩かせてもらうチャンスが訪れたのかもしれない。

今後、李自身は父島の太鼓により深くかかわっていきたいと願っているし、その太鼓の「自由さ」がどのような演奏を可能にするのかという点に迫りたいと考えている。このような取り組みも含め、筆者らは自他の比較も交えながら、「海域」によってつくられる父島の生活世界の特質についてさらなる探求を続けていきたい。

付記

本エッセイは、李が執筆した草稿に、河野・横田が加筆・修正を加えたものである。父島での現地滞在は、2024年3月9日から2024年3月19日までの期間と2024年11月1日から2024年11月4日までの期間に計2回実施し、いずれも人間文化研究機構海域アジア・オセアニア研究プロジェクト東京都立大学拠点からの支援によって可能になった。筆者らを2度もあたたかく迎え入れてくださった父島の住民に感謝申し上げたい。

参考文献

- 河野正治・横田浩一・李婧 2024「新たな時を告げる「おが丸」出港——小笠原諸島父島における出会いと別れの物語(その1)」『海域アジア・オセアニア NEWSLETTER』2: 173-178。
- 後藤 明 2010「環太平洋海域の伝統的船舶技術の交流について——小笠原・八丈島のカヌー漁船を題材に」『神奈川大学国際常民文化機構年報』1: 75-82。
- 小西潤子 2019「小笠原に伝播した歌——時間と空間を超えたミクロネシアの混淆文化」石森大知・丹羽典生編『太平洋諸島の歴史を知るための60章——日本とのかかわり』明石書店、pp. 307-311。
- 李 婧 2022「「ものがたり」と「ものづくり」からみる都市祭礼の持続——東京都北区王子における「狐の行列」の事例から」『生活学論叢』41: 1-14。

(り・せい 東京都立大学／かわの・まさはる 東京都立大
学／よこた・こういち 人間文化研究機構・東京都立大学)